

「未来の命 守りたい」

釜石の語り部 石巻・旧大川小を視察

東日本大震災の伝承活動をする岩手県釜石市の「いのちをつなぐ未来館」のスタッフらが15日、石巻市の旧大川小を視察で訪れ、児童遺族で「大川伝承の会」共同代表の佐藤敏郎さん(56)の語り部案内を聞いた。釜石の「奇跡」や大川の「悲劇」などと一面的にくくられ、対比されることへの葛藤と違和感を率直に語り合い「未来の命を守りたい」という共通の思いを胸に、連携して伝承を続けることを確認した。

【百武信幸、中尾卓英】

この日は未来館を運めた。「よく目をこら営する観光会社・釜石 せは子供たちの姿が見DMCがスキルアップ えてくる」と静かに語のため実施し、初めてりかけ「今は『あの大川小を訪れた菊池のど川小』と言われるが、かさん(24)、川崎杏樹 あの日まで特別な場所さん(24)ら未来館の語ではなく、何でもないり部のスタッフをはじめ 日々があった」などと、め9人が参加した。 かつての日常を伝える

同小は津波で児童・ ことで失ったものの大きさを伝えていること教職員84人が犠牲となり、6年生だった次女を説明した。そして「皆みずほさん(当時12歳) さんには、大川小は悲を亡くした佐藤さん 惨な場所ではなく未来は、子供たちが校庭を をひらく場所だと伝えて走り回っていた震災前 てほしい。その答えは、の学校風景から話し始 救えなかった命と向き

思い共有 連携して伝承を

合った先にある」と方 徒が児童の手を引いて率先避難し多くの命を 守った出来事が「釜石

参加したメンバーは うなずき、時折涙を浮かべながら聞いた。釜 石では、釜石東中の生



大川小で次女を亡くした佐藤敏郎さん(右)の説明を聞く「いのちをつなぐ未来館」の(左から)菊池のどかさん、川崎杏樹さんら。石巻市の旧大川小で

3年だった菊池さん は、ずっと違和感を抱いてきたといい「なぜ2校だけ比べるのか」と思い続けてきた。奇跡と言われると言いつけなかった。釜石でも「直すべき部分もあったが、これからはできなかったことも誠実に伝えたい」と涙を拭いた。 当時同中2年だった川崎さんは「あの時釜石で校庭に避難し、ここにいるような感覚で聞いた。釜石に帰ったから学校や公民館でネットワークを組み、小中学生の避難行動や162人以上の方々が犠牲になった鶴住居防災センターの出来事を語り継ぐ場を作っていきたい」と話した。

佐藤さんは「釜石と大川を比べる必要はなく、それを越えて一般化しないといけない。伝えるためにネットワークが必要で、コラボ(協力)してより深く、広く伝えたい」と語った。